

竹の木戸

国木田独歩

青空文庫

上

おおぼ
 大庭真蔵という会社員は東京郊外に住んで京橋区辺の事務所に
 通っていたが、電車の停留所まで半里はんみち以上もあるのを、毎朝欠
 かさずテクテク歩いて運動にはちようど可いいと言っていた。温厚おとな
 しい性質だから会社でも受が可よかった。

家族は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる細君、細
 君の妹のお清きよ、七歳ななつになる娘の礼ちゃんこれに五六年前から居る
 お徳という女中、以上五人に主人あるじの真蔵を加えて都合六人であつ
 た。

細君は病身であるから余り家事に関係しない。台所元の事は重にお清とお徳が行つていて、それを小まめな老母が手伝っていたのである。別けても女中のお徳は年こそ未だ二十三であるが私はお宅に一生奉公をしますという意気込で権力が仲々強い、老母すら時々この女中の言うことを聞かなければならぬ事もあつた。我儘過るとお清から苦情の出る場合もあつたが、何しろお徳はお家大事と一生懸命なのだから結極はお徳の勝利に帰するのであつた。

生垣一つ隔てて物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮している。亭主が二十七八で、女房はお徳と同年輩位、そしてこの隣交際の女性二人は互に負けず劣らず喋舌り合つ

ていた。

初め植木屋夫婦が引越して来た時、井戸がないので何卒か水を汲ましてくれと大庭家に依頼たのみに来た。大庭の家ではそれは道もつと理もなことだと承諾ゆるしてやった。それからかれこれ二月ばかり経つと、今度は生垣いけがきを三尺ばかり開放あけさしてくれろ、そうすれば一々御門へ迂廻まわらんでも済むからと頼みに来た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊ことにお徳は盜棒どろぼうの入口こしらを造えるようなものだと言張した。が、しかし主人真蔵あるじの平常かねての優しい心から遂にこれを許すことになつた。其方そちらで木戸を丈夫に造り、開閉あけたてを嚴重にするという条件であつたが、植木屋は其処そこらの藪やぶから青竹を切つて来て、これに杉の葉など交ぜ加えて無細工ぶさいくの木戸を造く

つて了つた。出来上つたのを見てお徳は

「これが木戸だろうか、掛かけが金かねは何どこ処こに在あるの。こんな木戸なん

か有るも無いも同じことだ」と大声で言つた。植木屋の女房のお源は、これを聞きつけ

「それで沢山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るような立派な

木戸が出来るものか」

と井戸いど辺ばたで釜かまの底を洗いながら言つた。

「それじゃア大工さんを頼めば可い」とお徳はお源の言葉が癩しやくにさわ触り、植木屋の貧乏なことを知りながら言つた。

「頼まれる位なら頼むサ」とお源は軽く言つた。

「頼むと来るよ」とお徳は猶もひと一つ皮肉を言つた。

お源は負けぬ気性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於けるお徳の勢力を知っているから、逆らつては損と虫を圧えて「まあそれで勘弁しておくれよ。出入りするものは重に私ばかりだから私さえ開閉に気を附けりやア大丈夫だよ。どうせ本式の盗棒なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやア仕ないからね」

と半分折れて出たのでお徳

「そう言えばそうさ。だからお前さんさえ開閉を嚴重に仕ておくれなら先ア安心だが、お前さんも知つてるだろう此里はコソコソ泥棒や屑屋の悪い奴が漂行するから油断も間際もなりや仕ない。そら近頃出来たパン屋の隣に河井様て軍人さんがあるだろ

う。彼家あそこじゃア二三日前に買立の銅あかの大きな金かな盥だらいをちよろりと盗やられたそうだからねえ」

「まあどうして」とお源は水を汲む手を一寸と休めて振り向いた。

「井戸いど辺ばたに出ていたのを、女中が屋後うらに干物に往いったぼっちりの間まに盗やられたのだとサ。矢張やっばり木戸が少しばかり開あいていたのだとサ」

「まあ、真実ほんとに油断がならないね。大丈夫私は気を附けるが、お徳さんも盗やられそうなものは少ちよつと時とでも戸外そとに放棄うっちゃって置かんようになさいよ」

「私あたしはまあそんなことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れることが有るからね、お前さんも屑屋なんかを附けておくれよ。」

木戸から入るにや是非お前さん宅うちの前を通るのだからね」

「ええ気を附けるともね。盗とられる日にや薪まき一本だつて炭ひときれ一片だつて馬鹿々々しいからね」

「そうだとも。炭一片とお言いだけけれど、どうだろうこの頃の炭の高価たかいことは。一俵八十五錢の佐倉さくらがあれだよ」とお徳は井戸から台所口へ続く軒下に並べてある炭俵ひとつの一を指して、「幾干入いくばいてるものかね。ほんとに一片何錢に当つくだろう。まるでお錢かねを涼しちりんちりんで燃しているようなものサ。土竈どがまだつて堅かた炭すみだつて悉みんな去年の倍と言つても可い位だからね」とお徳は嘆息ためいきまじりに「真ま実にやりきれや仕ない」

「それに御宅は御人数ごにんずも多いんだから入用いることも入用サね。私あたしの

とこなんか二人きりだから幾干も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計量炭はかりずみを毎日のように買うんだからね、全くやりきれや仕ない」

「全く骨だね」とお徳は優しく言った。

以上炭の噂うわさまで来ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さな
いで何時いつしか元のお徳お源たちかえに立還りたちかえぺちやくちやと仲善く喋舌しゃべ
り合っていたところは埒らちも無い。

十一月の末だから日は短い盛さかりで、主人真蔵が会社から帰つたのは最早暮れがかりであつた。木戸が出来たと聞いて洋服のまま下駄を突掛け勝手元の庭へ廻わり、暫時しばらくは木戸を見てただ微笑していたが、お徳が傍そばから

「旦那様 大変な木戸で、御座いましょう」と言つたので

「これは植木屋さんが作らえたのか」

「それで御座います」

「随分妙な木戸だが、しかし植木屋さんにしちやア良く出来てる」と手を掛けて揺振ゆすぶつてみて

「案外丈夫そうだ。まあこれでも可いい、無いよりか増ましだろう。その内大工を頼んで本当に作らすことに仕よう」と言つて「竹で作こしらえても木戸は木戸だ、ハ、ハハハハ」と笑いながら屋内うちへ入つた。

お源はこれを自分の宅うちで聞いていて、くすくすと独ひとりで笑いながら、「真ほん実に能よく物の解る旦那だよ。第一あんな心持の優よい人つたらめつたに有りや仕ない。彼家あそこじや奥様おくさんも好かたい方だし御隠居

様も小まめにちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お清様
 は出戻りだけに何処か執拗れてるが、然し氣質は優しい方だし」
 と思いつづけて来てハタとお徳の今日昼間の皮肉を回想して
 「水の世話にさえならなきや如彼奴に口なんか利かしや仕ないん
 だけど、房州の田舎者奴が、可愛がつて頂だきや可い気になりや
 アがつてどうだろうあの図々しい案梅は」とお徳の先刻の言
 葉を思い出し、「大変な木戸でしょうだつて、あれで難癖を付け
 る積りが合憎と旦那がお取上に相成らんから可い気味だ。愚態
 ア見やアがれだ」と又つと気を変えて「だけど感心と言えは感心
 だよ。容色も悪くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつ
 て嫁にいかれるのに、ああやつて一生懸命に奉公しているんだか

らね。全く普通の女にや真似が出来ないよ。それに恐しい 正直
 者だから大庭様でも彼女に任かして置きや間違はないサ……」
 こんな事を思いながらお源は洋燈を点火て、火鉢に炭を注ごう
 として炭が一片もないのに気が着き、舌鼓をして古ぼけた薬
 罐に手を触つてみたが湯は冷めていないので安心して「お湯の熱
 い中に早く帰つて来れば可い。然し今日もしか前借して来てくれ
 ないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらい木葉を拾つて来ても間に
 合うが、明日食うお米が有りや仕ない」と今度は舌鼓の代に力の
 ない嘆息を洩した。頭髪を乱して、血の色のない顔をして、薄
 暗い洋燈の陰にしよんぼり坐っているこの時のお源の姿は随分憐
 な様であつた。

其所へのつそり帰つて来たのが亭主の磯吉である。お源は単いきな直前借の金のことを訊きいた。磯は黙つて腹掛から財布を出してお源に渡した。お源は中を査あらためて

「たった二円」

「ああ」

「二円ばかり仕方が無いじゃアないか。どうせ前借するんだもの五円も借りて来れば可いのに」

「だって貸さなきや仕方がない」

「それやそうだけど能く頼めば親方だつて五円位貸してくれそんなものだ。これを御覧」とお源は空からっぽ虚すみとりの炭籠を見せて「炭だつてこれだろう。今夜お米を買ったら幾いくら干も残りや仕ない。……」

磯は黙つて煙草をふかしていたが、煙管をポンと強く打いて、膳を引寄せ手盛で飯を食い初めた。ただ白湯を打かけてザクザク流し込むのだが、それが如何にも美味そうであつた。

お源は亭主のこの所為に気を吞れて黙つて見ていたが山盛五六杯食つて、未だ止めそうもないので呆れもし、可笑くもなり

「お前さんそんなにお腹が空いたの」

磯は更に「椀盛けながら「俺は今日半食を食わないのだ」

「どうして」

「今日彼時から往つたら親方が厭な顔をしてこの多忙しい中を何で遅く来ると小言を言つたから、実はこれこれだつて木戸の一件を話すと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、糞忌々し

いからそれからグングン仕事に掛つて二時過ぎになるとお茶飯やっが出たが、俺は見向みむきも仕ないんだ。お女中が来て今日はお美味いしい海の苔卷りまきだから早やく来て食べると言つたが当頭とうとう俺は往かないで仕事を仕続けてやつたのだ。そんなこんなで前借のこと親方に言い出すのは全く厭いやだつたけど、言わないじゃおられんから歸りがけに五円貸してくれろと言うと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手て前の凶めえ々しいのには敵かなわんよ、そらこれで可よかろうつて二円出して与よこしたのだ。仕方が無いじゃアないか」と磯は腹すの空いた訳と二円外前借ほかが出来なかつた理由わけを一遍に話して了しまつた。そして話おわし了つたころ漸やっと箸はしを置いた。

全体磯吉は無口の男で又た口の利ききようも下手へただがどうかする

と啖たんかまじ火交りじで今のように威勢の可い物の言い振ぶをするふりこともあ
る、お源にはこれが頗すこぶる嬉うれしかったのである。然しお源には連つれそ
添つてから足掛三年にもなるが未だ磯吉は怠惰なまけもの者だか働はたらき人にん
だか判断が着かのである。東京女の気まぐれ者にはそれで済すんで
ゆくので、三日も四日も仕事を休む、どうかすると十日も休む、
けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅うちの磯様さんだと心得こころえている、
だからサアとなれば困りや仕ないと信じている。然し何処どこまで行
つたらその「サア」だかそんなことはお源も考えたことはない。
又たお源は磯さんはイザとなれば随分人の出来ない思きつた大胆
なことをする男だと頼たのもしがっている。けれどそうばかり思えん
こともある。その実案外い久地くじのない男かしらと思う場合もある

が、それは一文なしになつて困り抜た時などで、そう思うと情なくなるからなるべくそれは自分で打消していたのである。

實際磯吉は所謂「解らん男」で、大庭の女連は何となく薄気味悪く思つていた。だからお徳までが磯には憚る風がある。

これがお源には言うに言われない得意なので、お徳がこの風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使つた時など嬉さが込上げて来るのであつた。

それで結極のべつ貧乏の仕飽をして、働き盛りでありながら世帯らしい世帯も持たず、何時も物置か古倉の隅のよすみこうな所ばかりに住んでいる、従つてお源も何時しか植木屋の女房連から解らん女だ、つまり馬鹿だとせられていたのだ。

磯吉の食事が済むとお源は筥せざるを持って駈出かけだして出たが、やがて量はかりずみ

炭すすを買って来て、火を起しながら今日お徳と木戸のことで言いがあつたこと、旦那が木戸を見て言つた言葉などをべらべら喋しゃべつ舌聞かしたが、磯は「そうか」とも言わなかつた。

そのうち磯が眠そうに大欠伸おおあくびをしたので、お源は垢染あかじみた煎餅せんべいぶとん布団ふだんを一枚敷いて一枚被かけて二人一緒に一個身体ひとつからだのようになつて首を縮めて寝て了つた。壁の隙間すきまや床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足も縮められるだけ縮めているが、それでも磯せなかの背部は半分外はみだしに露出あらわしていた。

中

十二月に入ると急に寒気が増して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突然だしぬけに冬の特色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初て郊外に住んだ連れんじゆう中を喫驚びっくりさした。然し大庭真蔵は慣れたもので、長靴を穿はいて厚い外套がいとうを着て平気で通勤していたが、最初の日曜日は空青々と晴れ、日が煌きら々と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日こはるびより和が又立返たちもどったようなので、真蔵とお清は留守居番、老母と細君は礼ちゃんとお徳を連て下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと称して出慣れぬ女連そは外とての仕度に一ひとさわぎ騒さわぎするのである。それで老母を初め細君娘、お

徳までの着変きかえやら何かに一しきり騒さわしかったのが、出て去いった後あとは一時に森しんとなつて家内やうちは人氣ひとげが絶たようになった。

真蔵は銘仙の襦どてら袍の上へ兵古帯へこおびを巻きつけたまま日射ひあたりの可い自分の書齋ねころに寝転ねころんで新聞を讀んでいたがお午時ひる前になると退屈たいくつになり、書齋を出て縁えんがわ辺をぶらぶら歩いていると

「兄にいさま様」と障子越しにお清が声をかけた。

「何です」

「おホホホホ『何です』だつて。お午食ひるは何にも有りませんよ」

「かしこ参りました」

「おホホホホ『かしこ参りました』だつて真実ほんとに何にもないんですよ」

其^{そこ}処で真蔵はお清の居る部屋^{へや}の障子を開けると、内^{なか}ではお清が
せつせと針仕事をしている。

「大変勉強だね」

「礼ちゃんの被^ひ布^ふですよ、良い柄でしょう」

真蔵はそれには応^{こた}えず、其^{そこ}処^こ辺を見廻わしていたが、

「もう少し日^ひ射^{あたり}の好い部屋で縫^やったら可さそうなものだな。そし
て火鉢^{ひばち}もないじゃないか」

「未だ手が凍^{かじ}結^けるほどでもありませんよ。それにこの節は御儉約
ということに決^{きめ}定^めたのですから」

「何の御儉約だろう」

「炭です」

「炭はなるほど高価たかくなつたに違ちがないが宅うちで急にそれを節約するほどのことはなからう」

真蔵は衣食台所元のことなど一切いっせつ関係しないから何も知らないのである。

「どうして兄様にいさん、十一月でさえ一月の炭の代がお米の代よりか余程つほど上なんですもの。これから十二、一、二と先まず三月が炭の要いる盛さかりですから節約出来るだけ仕ないと大変ですよ。お徳が朝から晩まで炭が要る炭が高価たかいて泣言ばかり言うのも無理はありませんわんわ

「だって炭を節約して風邪かぜでも引ちや何もなりや仕ない」

「まさかそんなことは有りませんわ」

「しかし今日は好い案排あんばいに暖かいね。母おっかさん上かみでも今日は大丈夫

夫だろう」と両手を伸して大欠伸おおあくびをして

「何時かしらん」

「最早もっ直ぐ十二時でしょうよ。お午食ひるにしましょうか」

「イヤ未だ腹が一向空すかん。会社だと午食ひるの弁当が待遠いようだ

けどなア」と言いながら其処を出て勝手の座敷から女中部屋まで

覗のぞきこんだ。女中部屋など従これまで来入ったことも無かったのである

が、見ると高窓が二尺ばかり開け放しになつてゐるので、何心なく

其処から首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源

が我知らず見上た顔とぴたり出会つた。お源はサと顔を真赤にし

て狼うろたえ狽たえきつた声を漸やっと出して

「お宅ではこういう上等の炭をお使いなさるんですもの、堪りま
せんわね」と佐倉の切炭を手に持っていたが、それを手玉に取りだ
した。窓の下は炭俵が口を開けたまま並べてある場処で、お源が
木戸から井戸辺いどばたにゆくには是非この傍そばを通るのである。

真蔵も一寸狼狽ちよつとまじいて答に窮したが

「炭のことは私共に解らんで……」と莞爾にっこりわらつ微笑してそのまま首を
引込めて了った。

真蔵は直ぐ書齋に返つてお源の所為しよさに就て考がえたが判断が容
易つかに着ない。お源は炭を盗んでいるところであつたとは先ず最初
に来る判断だけれど、真蔵はそれをそのまま確信することが出来
ないのである。実際ただ炭を見ていたのかも知れない、通りがか

りだからツイ手に取つて見ているところを不意に他人から瞰下されて理由もなく顔を赤らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽えたのかも知れない。と考えれば考えられんこともないのである。真蔵はなるべく後の方に判断したいので、遂にその心で決定ともかく何人にもこの事は言わんことにした。

しかし万一もし盗んでいたとすると放下つて置いては後が悪かろうとも思ったが、一度見られたら、とても悪事を続行することは得為すまいと考えたから尚お更らこの事は口外しない方が本当だと信じた。

どちらにしてもお徳が言った通り、彼処へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はそろそろ帰宅かえつて来た。一同が茶の間に集まつてがやがやと今日の見聞を今一度繰返して話合うのであつた。お清は勿論もちろん、真蔵も引出されて相槌あいづちを打つて聞かなければならない。礼ちゃんれいちゃんが新橋の勸工場かんこうばで大きな人形を強請ねだつて困らしたの、電車の中に泥酔者よつばらいが居て衆人みんなを苦しめたの、真蔵に向て細君が、所天あなたは寒むがり坊だから大徳で上等飛とびき切りの舶来りくわいのシャツを買つて来たの、下町へ出るとどうしても思つたよりか余計にお金を使うだの、それからそれと留度とめどがない。そして聞く者よりか喋舌しゃべつている連中の方が余程よつほど面白おもしろそうであつた。

先ずこのがやがやがひとしきり一頻す止むとお徳は急に何か思い出した

ように起て勝手口を出たが暫時して返つて来て、妙に真面目な顔をして眼を円くして、

「まあ驚いた！」と低い声で言つて、人々の顔をきよろきよろ見廻わした。人々も何事が起つたかとお徳の顔を見る。

「まあ驚いた！」と今一度言つて、「お清様は今日屋外の炭をお出しになりや仕ませんね？」と訊いた。

「否、私は炭籠の炭ほか使わないよ」

「そうら解つた、私は去日からどうも炭の無くなりかたが変

だ、如何炭屋が巧計をして底ばかり厚くするからつてこうも急に

無くなる筈がないと思つていたので御座いますよ。それで私は想

当つてる事があるから昨日お源さんの留守に障子の破目か

ら内なかをちよいと覗のぞいて見たので御座いますよ。そうするとどうでしよう」と、一段声を低めて「あの破やぶ火鉢ひばちに佐倉ふたつが二片ちやんと埋いかつて灰が被かけて有るじやア御座いませんか。それを見て私はもうきつと最早必定きめそうだと決定きめて御隠居様に先ず申上げてみようかと思いましたが、一つ係蹄わなをかけて此方こちで験ためした上と考がえましましたから今日行やつて試みたので御座いますよ」とお徳はにやり笑つた。

「どんな係蹄わなをかけたの？」とお清が心配しるしそうに訊きいた。

「今日出る前に上に並んだ炭に一々符号しるしを付けて置いたので御座います。それがどうでしょう、今見ると符号しるしを付けた佐倉よつが四個よつそつくり無くなつているので御座います。そして土竈どがまは大きなのを二個ふたつ上に出して符号を付けて置いたらそれも無いのです」

「まあどうしたと云うのだろう」お清は呆あきれて了った。老母と細君は顔見合して黙っている。真藏まぞうは偕さては愈々いよいよと思つたが今日見た事を打明けるだけは矢張やはり見合あわした。つまり真藏にはそうまでするに忍びなかつたのである。

「で御座いますから炭泥棒は何人だれだか最早解もうつてます。どう致いたしましょう」とお徳は人々みんながこの大事件を喫驚びっくりしてごうごうと論評を初めてくれるだろうと予期していたのが、お清が声を出してくれた外、旦那だんなを初め後の人は黙っているので少し張合が抜けた調子でこう問うた。暫時しばしく誰も黙っていたが

「どうするツて、どうするの？」とお清が問い返した、お徳は少々焦急しじれつたくなり、

「炭をですよ。炭をあのままにして置けばこれから幾干でも取られます」

「台所の縁の下はどうだ」と真蔵は放擲うっちゃつて置いてもお源が今後容易に盗み得ぬことを知っているけれど、その理由わけを打明けないと決心きめてるから、仕様事なしにこう言つた。

「充満いっぱいで御座います」とお徳は一言で拒絶した。

「そうか」真蔵は黙つて了う。

「それじゃこうしたらどうだろう。お徳の部屋の戸棚とだなの下を明けて当分ともかく彼処あそこへ炭を入れることにしたら。そしてお徳の所の有品のは中の部屋の戸棚とだなを整理かたづけて入れたら」と細君が一案を出した。

「それじゃアそう致しましょう」とお徳は直ぐ賛成した。

「お徳には少し気の毒だけれど」と細君は附加した。

「否、私は『中の部屋』のお戸棚へ衣類を入れさして頂ければ尚

お結構で御座ます」

「それじゃ先あそう決定るとして、全体物置を早く作れというの

に真蔵がぐずぐずしているからこういうことになるのです。物置

さえあれば何のこともないのに」と老母が漸と口を利たと思つた

ら物置の愚痴。真蔵は頭を搔いて笑つた。

「否、こういうことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座います

よ、ですから私は彼処を開けさすのは泥棒の入口を作えるような

ものだと申したので御座います。今となれや泥棒が泥棒の出入

ぐちこしら
口を作えたようなものだ」とお徳が思わず地声の高い調子で言
つたので老母は急に

「静に、静に、そんな大きな声をして聴れたらどうします。私も
彼処を開けさすのは厭じゃつたが開けて了つた今急にどうもなら
ん。今急に彼処を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時
まであんな物置小屋みたような所にも居られんで移転なりどう
なりするだろう。そしたら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも
言わんで知らん顔を仕てる、お徳も決してお源さんに炭の話など
仕ちやなりませんぞ。現に盗んだところを見たのではなし又高が
少しばかりの炭を盗られたからつてそれを荒立てて彼人者だち
に怨恨れたら猶お損になりますぞ。真実に」と老母は老母だけの

心配を諄じゆんじゆん々とと説といた。

「真ほん実にそうよ。お徳はどうかすると譏あてこすり諛をを言い兼ないいがお

源さんにそんなことでもすると大変よ、反あべこべ対に物もの言いいを附けら

れてどんな目に遇あうかも知れんよ、私はあの亭主の磯が気味が悪

くつて成らんのよ。変へん妙みょう来らいな男ねえ。あんな奴に限つて向むう

見みずずに人に喰くつてかかるよ」とお清も老母と同じ心配。老母も磯

吉のことは口には出さなかつたが心には無論それが有たのである。

「何にあの男だつて唯の男サ」と真蔵は起たち上あがりながら「然けれども

先まア関かり係あわんが可い」

真蔵は自分の書齋に引込み、炭問題も一段落着いたので、お徳とお清は大急で夕御飯の仕度に取り掛つた。

お徳はお源がどんな顔をして現われるかと内々待っていたが、平常も夕方には必然水を汲みに来るのが姿も見せないので不思議に思っていた。

日が暮て一時間も経てから磯吉が水を汲みに来た。

下

お源は真蔵に見られても巧く誤魔化し得たと思つた。ちようど真蔵が窓から見下した時は土竈炭を袂に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手で圧え、更に一個取ろうとするのであつたが、元来性質の良い邪推などの無い旦那だから多分気が附かなかつただ

ろうと信じた。けれど夕方になつてどうしても水を汲みにゆく気になれない。

そこで磯吉が仕事から帰る前に布団ふとんを被かぶつて寝て了しまつた。寝たつて眠いむられは仕ない。垢染あかじみた煎餅せんべい布団ふとんでも夜は磯吉と二人で寝るから互の体温で寒気も凌しのげるが一人では板のようにしやちつ張つて身に着かないで起きているよりも一倍寒く感ずる。ぶるぶる慄ふるえそうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつたところを見ると人が寝てるとは承うけとれ知ん位だ。

色々考えると厭いや悪きもちな心地がして来た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先せん達だつてからちよくちよく盗んだ炭の高ひとこそ多くないが確あきら的かに人目を忍んで他の物を取つたのは今度

が最初はじめてであるから一念そこ其処へゆくと言まででない不安を覚えて来る。この不安の内には恐怖おそれも羞恥はじこもも籠こもっていた。

眼前めのさきにまざまざと今日の事が浮んで来る、見下した旦那の顔はつきりが判然出て来る、そしてテレ隠しに炭を手玉に取った時のことを思うと顔から火が出るように感じた。

「ほんとう真実にどうしたんだろう」とお源は思わず叫んだ。そして徐そろそろ逆上気味になって来た。「もしか知れたらどうする」。「知

れるものかあの旦那は性質ひとが良いもの」。「性質ひとの良いは当にならぬ」。性質ひとの善良いいのは魯鈍のろまだ」と促急せきこ込んで独問答ひとりをしていたが

「魯鈍のろまだ、魯鈍だ、大魯鈍だ」と思わず又叫んで「フン何が知れ

るもんか」と添足^{つけた}した。そして布団から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戸に月が射している。けれども起きて洋燈^{ランプ}を点けようとも仕ないで、直ぐ首を引込^{ひっこめ}て又た丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて来た。

頭が割れるように痛むので寝たのだと聞いて磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈^ひを点^つけ、薬罐^{やかん}が微温湯^{ぬるまゆ}だから火鉢に炭を足し、水も汲みに行つた。湯の沸騰^{たぎ}るを待つ間は煙草をパクパク吹^{ふか}していたが

「どう痛むんだ」

返事がないので、磯は丸く凸^{もちあが}起つた布団を少時^{しばら}く熟^{じつ}と視^みていたが

「オイどう痛むんだイ」

相変らず返事がないので磯は黙つて了つた。その中湯うちが沸騰わいて来たから例の通り氷のように冷た飯ひえへ白湯さゆを注かけて沢庵たくあんをバリバリ、待ち兼た風に食い初めた。

布団の中でお源が啜すすりなき泣なする声が聞えたが磯には香こう物ものを噛かむ音と飯を流し込む音と、美味うまいので夢中になつているのと同お聞えなかつた、そして飯を食い終つたころには啜泣すすりなきの声も止やんだのである。

磯が火鉢の縁ふちを忽こつこつ々叩たたき初めるや布団がむくむく動いていたが、やがてお源が半分布団くるまに巻纏まつて其処へ坐つた。前あが開あいて膝ひざがしら頭あたまが少し出ていても合あうとも仕しない、見ると逆上のぼせて顔を

赤くして眼は涙に潤み、頻りに啜泣を為している。

「どうしたと云うのだ、え？」と磯は問うたが、この男の持前として驚いて狼狽うろたえた様子は少しも見えない。

「磯さん私は最早もつくづく厭いやになった」と言い出してお源は涙声になり

「お前さんと同棲いっしょになつてから三年になるが、その間ほんとう眞実に食うや食わずで今日とは思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も樂を仕様しょうとは思わんけれど、これじゃ余あんなりだと思つてお前さんこれじゃ乞食も同然じゃ無いか。お前さんそうは思わないの？」

磯は黙っている。

「これじゃ唯だ食つて生きてるだけじゃないか。饑死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それじゃ余り情ないと私は思うわ」涙を袖で拭て「お前さんだつて立派な職人じゃないか、それに唯た二人きりの生活だよ。それがどうだろう、のべつ貧乏の仕通しでその貧乏も唯の貧乏じゃ無いよ。満足な家には一度だつて住まないで何時でもこんな物置か——」

「何を何時までべらべら喋舌てるんだい」と磯は矢張お源の方はむか向ないで、手荒く煙管を撃いて言つた。

「お前さん怒るなら何程でもお怒り。今夜という今夜は私はどうあつても言うだけ言うよ」とお源は急促込んで言つた。

「貧乏が好きな者はないよ」

「そんなら何故お前さん月の中十日は必然休むの？ お前さんは

お酒は呑のまないし外に道楽はなし満足に仕事に出てさえおくれなら

如斯こんな貧乏は仕ないんだよ。——」

磯は火鉢の灰を見つめて黙っている。

「だからお前さんがもう少し精出しておくれならこの節のように計はかりずみ量炭もろくに買かえないような情ない……」

お源は布団へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に

下りて麻裏あさうらを突掛けるや戸外そとへ飛び出した。戸外は月冴えて風

はないが、骨身に徹こたえる寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七

八丁もゆくと金次という仲間が居る、其家そこを訪たずねて、十時過まで

金次と将棋を指して遊んだが、かえりがけ帰掛ことわに一寸一円貸せと頼んだ。

明日なら出来るが今夜は一文もないと謝絶ことわられた。

かえりみち帰路

に炭屋がある。この店は酒も薪まきも量はかりずみ炭も売り、大

庭もこの店から炭薪を取り、お源も此店ここへ炭を買いに来るのであ

る。新開地は店を早く終しまうのでこの店も最早閉もっていた。磯は少

時ばらく此店ここの前を迂路うろ々々していたが急に店の軒下に積である炭俵

ひとつの一個をひよいと肩に乗て直ぐ横の田甫道たんぼみちに外それて了った。

大急で帰宅かえつて土間にどしりと俵を下した音に、泣き寝入ねいりに寝

入っていたお源は眼を覚したが声だせを出なかつた。そして今のは何

の響とも気に留めなかつた。磯もそのままお源の後から布団の中

に潜もぐり込んだ。

翌朝になつてお源は炭俵に気が着き、喫驚びっくりして

「磯さんこれはどうしたの、この炭俵は？」

「買って来たのサ」と磯は布団を被かぶつてゐるまま答えた。朝飯めしが出るまでは磯は床を出ないのである。

「何店どこで買ったの？」

「何処どこだつて可いじゃないか」

「聞いたつて可いじゃないか」

「初公の近所の店だよ」

「まあどうしてそんな遠くで買ったの。……オヤお前さん今日お米をかうお錢あしを費つかつて了しましまいね」

磯は起上つて「お前がやれ量炭も買えんだのツて八やか間ましく言

うから昨夜ゆうべ金公の家へ往いつて借りようとして無ないつてやがる。それから直ちぐ初公とこの家へ往いつたのだ。炭を買かうから少すこばかり貸かせといつたら一俵位おれんとこなら俺おれんとこ家の酒屋で取とつて往いけと大おおきこと言うから直ちぐ其家そこうちで初公の名前で持もつて来きたのだ。それだけあれば四五日は保あるだろう」

「まあそう」と言いつてお源はよろこんだ。直ちぐ口を明あけて見たかつたけれど、先まあ後の事ことと、せつせと朝飯あさめしの仕度しどをしながらか「え、四五日どころか自宅うちなら十日もあるよ」

昨夜ゆうべ磯吉が飛出とした後あとでお源は色々いろくに思おもい難なやんだ末すえが、亭主ていしゅに精出せいしゅせと勧すすめる以上いじょう、自分おれも氣きを腐くらして寝ねていちや何なにもならない、又またたお隣となりへも顔かえつを出ださんと却かえつて疑うたががわれるとこころう考かんえたので

ある。

其処そこで平常いつもの通り弁当持たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一ひと通と片附たところでバケツを持って木戸を開けた。

お清とお徳が外に出ていた。お清はお源を見て

「お源さん大変顔色が悪いね、どうか仕したの」

「昨日きのうから少し風邪かぜを引たもんですから……」

「用心なさいよ、それは不可いけない」

お徳は「お早う」と口早に挨拶あいさつしたきり何も言わない、そし

てお源が炭俵の並べてないのに気が着き顔色を変えて眼をぎよろぎよろさしているのを見て、にやり笑った。お源は又た早くもこれを看取みとりお徳の顔を睨にらみつけた。お徳はこう睨みつけられたと

なると最早喧嘩だ、何か甚い皮肉を言いたいがお清が傍に居るので辛棒していると十八九になる増屋の御用聞が木戸の方から入て来た。増屋とは昨夜磯吉が炭を盗んだ店である。

「皆様お早う御座います」と挨拶するや、昨日まで戸外に並べてあつた炭俵が一個見えないので「オヤ炭は何処へ片附けたのですか」

お徳は待つてたという調子で

「ああ悉皆内へ入ちやつたよ。外へ置くとどうも物騒だからね。今の高価い炭を一片だつて盗られちや馬鹿々々しいやね」とお源を見る、お清はお徳を睨む、お源は水を汲んで一歩三歩歩るき出したところであつた。

「全く物騒ですよ、私わたしのところでは昨夜当到ゆうべとうとう一俵盗ぬすすまれました」

「どうして」とお清が問うた。

「戸外そとに積たんだまま、平時放いつもうちや下くだつて置くからです」

「何炭なにを盗ぬすられたの」とお徳は執着しゆうねくお源を見ながら聞いた。

「上等じやうとうの佐倉炭さくらです」

お源はこれ等の問答を聞きながら、齒を喰いしばって、踉蹌よろめいて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投ほうるように置いて大急ぎで炭俵の口を開けて見た。

「まア佐倉炭さくらだよ！」と思わず叫んだ。

お徳は老母からも細君からも、みつしり叱しかられた。お清は日の暮になつてもお源の姿が見えないので心配して御氣慊ごきげん取りと風邪見舞とを兼ねてお源を訪たずねた。内が余り寂ひっそり然しておるので「お源さん、お源さん」と呼んでみた。返事がないので可恐こわごわ々々ながら障子戸を開けるとお源は炭俵を脚あしづぎ継にしたらしく土間の真まんな中の梁はりへ細帯をかけて死でいた。

二日経たつて竹の木戸が破壊こわされた。そして生垣いけがきが以前もとの様さまに復かえ歸かえつた。

それから二月経たつ過と磯吉はお源と同年輩おなじとしごろの女を女房に持つて、渋谷村に住んでいたが、矢張やはり豚小屋同然の住宅すまいであつた。

青空文庫情報

底本：「牛肉と馬鈴薯・酒中日記」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45）年5月30日初版発行

1983（昭和58）年7月30日2刷

※「促急込《せきこ》んで」と「急促込《せきこ》んで」の混在は底本通りにしました。

入力：Nana Ohbe

校正：門田裕志、小林繁雄

2004年6月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竹の木戸

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>